慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 徳田剛・杉本学・川本格子・早川洋行・浜日出夫著『ジンメルの論点』ハーベスト社、2018年
Sub Title	
Author	草柳, 千早(Kusayanagi, Chihaya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.182- 185
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0182

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

徳田剛・杉本学・川本格子・早川洋行・浜日出夫著『ジンメルの論点』
ハーベスト社、2018 年

草柳　千早

現代日本の社会学でジンメルは、ウェーバー、デュルケムと並び称せられながら、初学者にとって、まず読むならこれという定番的な作品があるようでないようで、手軽な文庫版にもあまり恵まれず、とっつきにくいのではないか。そこへ本書が登場した。もし学部生時代に本書があったなら私のジンメルとの出会い方はどれほど違ったものになっていただろうか、と思う。

「はじめに」によれば、本書は、「ジンメルの著作や論文・エッセイなどで取り扱われる重要なトピックごとにその「論点」を抽出し、それぞれの内容や議論の背景をまとめたような論集」を、として、「ジンメルのテキスト群に分け入るための「宝の地図」となるべく企画された」という。そして「ジンメルに初めて接する読者が彼の重要な概念や考え方の要点を把握できるようなつくりになっている」とある（p.2-3)（以下頁数は本書）。書けば数行だが、これを実行する過程は容易なものではないだろう。ジンメルの著作群は、本書巻末にもあるように、ズーアカンプ社刊「全集」で全 24 巻、白水社刊「著作集」で全 12 巻等、量的にも少なくなく、その内容は、周知のように一学問分野に留まらず多岐にわたる。「同じ「論点」が複数の論考の、異なる文脈のもとで取り上げられることも多々見られる」、ジンメルの「思考・論述スタイル」（p.2）を踏まえるならば、確かに本書は、その独自の「つくり」によって、作品ごとの紹介解説にはできない仕方で、読者をジンメルの世界へと誘い道案内してくれる。だが、浩瀚かつ多彩な著作群から重要な論点を掴み出し取捨選択して 1 冊の本に編むことは、何とも挑戦的な企画であり試みではないだろうか。著者たちに敬意を表さずにいられない。

かくして本書は、3 つの部――「関係・集団・社会」、「都市・文化・貨幣」、「認識・歴史・生」―― と 40 の下位項目で構成されている。項目には、〈社会化としての社会〉（以下項目名は〈　〉）〈相互作用と個人〉〈大都市の基本原理〉〈他者理解〉といった「原論」的なものから、ジンメルと言えば思い浮かべる者も多いであろう〈社交〉〈秘密〉〈信頼〉〈流行〉〈橋と扉〉〈異郷人〉等、さらには項目立て自体ジンメル的味わいの濃厚な、〈銅ではなく信頼〉〈神話の中の槍〉〈二は一より古い〉〈これでもありあれでもある〉等が並ぶ。こうした構成について著者側では、トピックの選択と配置について「編集サイドの意向や恣意性の影響を受けやすくなる」ことを難点に挙げている（p.2)。だが、意向や恣意性を排した中立的な編集などあり得ない。その意味で、この構成はそれ自体一つの到達点であり、目次そのものがすでにひとつの見応えある作品である。

草柳千早「書評：徳田剛・杉本学・川本格子・早川洋行・浜日出夫著『ジンメルの論点』」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）182-185 頁

さて、こうして全体の枠組みが設定された上で、各項目が分担執筆されている（逆、即ち執筆された原稿をもとに項目が決められたということは、よもやなかろうと仮定する）。各項目では、まずエピグラフにジンメルの文章が置かれる。そこからジンメルの論点が解説されるが、論述は、単なる解説に留まらない。一方では、それらの論点の現代社会との関わり、社会状況への適用可能性―― 例えば、〈秘密〉と SNS 利用、個人情報の問題、〈社会的水準〉とポピュリズム、〈人格と労働〉と現代の感情労働、「心」の商品化等――、また他方では、他の研究者の理論や学説・知見との関連性、繋がりや相違 ―― 例えば、〈貧者〉とデュルケムの犯罪論、ベッカーのラベリング論、〈有用価値と美的価値〉〈社交〉とパットナムの「社会関係資本」、〈二は一より古い〉における、ジンメルとウェーバー、デュルケム、さらにマートン、パーソンズとの関係、等、へと展開されていく。さらにまた、項目を超えて論点相互の繋がりも各所で示され ―― 例えば、〈秘密〉と〈信頼〉、〈多数決の原理〉と〈支配〉、〈異邦人〉と〈秘密〉と〈流行〉と〈社交〉等々――、形式上一旦は独立に挙げられた項目が、実は有機的な繋がりあるいは連続性を持つ議論の各側面を成していることがわかるようにもなっている。そして、こうした項目相互の関連づけから、ジンメル世界の重要モチーフ ―― 部分と全体、個人と社会、両義性、二重性等々 ――が自ずと浮かび上がってくる。見事である。

このようなつくりゆえに、本書はどの項目からでも読めて芋づる式に論点をたどっていくことができる。しかしこのたび、本稿を書く都合上、最初から順に通しで読んだ末、否、より正確には半ばから、奇妙な印象を持つに至った。それは、本書全体から醸し出される不統一感である。通常この種の本に対して、読者は一定の統制に基づく統一感を予期して臨む。著者側でも、項目の分担執筆に際して、共通して書くべきいくつかの事項、標準的なフォーマットのようなものが範型として共有される、ということがままあるだろう。ところが本書にはそのような考えは通用しない。読み始めは、ジンメル世界への入り口として、丁寧な解説で始まっており、このスタイルが続いていくものと思って読み進むにつれ、次第に様子が違ってくる。

「おわりに」に至っては、次のようなことが書かれている。かいつまむと ――ジンメルに初めて接する読者に、予備知識を前提とせずに専門的なことを説明するのは困難だが、わかりやすさを優先してむやみに単純化しては大事なことが伝えられず、かといって、読者が興味をもてるように現代的な文脈に引き寄せて解説すれば、本来の文脈からかけ離れて正しく趣旨が伝えられない恐れもある。そのような「葛藤の狭間」で、著者たちは「各々のスタイルで叙述した」とある。そして、「ある項目では、ジンメルの論点をなるべく忠実に解説することに専念し、またある項目では、解説者の関心に従って論点をかなり大胆に発展させている」、と（p188）――。なるほど、これが本書全体から受ける不統一感のよって来たるところだろう。「おわりに」はさらに続けて曰く、「その点では多少統一感に欠ける気はするが、ジンメルという人物の個性と解説者の個性との相互作用を楽しむつもりで、寛大に受け止めていただければ幸いである」（p.188）とのこと。「多少統一感に欠ける気がする」というのは、多少控え

めな表現である気がするが、ともあれ、これは乱暴な言い方かもしれないが、ある種、開き直りとも受け取れるような一文である。

実際、「なるべく忠実に解説に専念」系のものと、「かなり大胆に発展」系のものとは、その振幅も大きく、並びも順不同で、読者にとっては読んでみなければわからない形で、それぞれある。初めの方の〈社会化としての社会〉〈相互作用と個人〉は比較的前者寄りであり、導入にふさわしく感じられるが、やがてより後者側の存在が露わになってくる。〈都市の美学〉では「ローマ」「フィレンツェ」「ヴェネツィア」をめぐるジンメルの論考が解説されている。それで完結するかと思いきや、ページをめくると、もう紙幅も残り少ない局面で、「筆者の出身地である関西地方には、京都・大阪・神戸という 3 つの個性的な都市がある」、と行き成り場面が転換する。確かに 3 都市論という点では繋がっているが、思いがけない時空のワープと、それを軽々こなす著者の飄々とした論の運びが面白く、思わず笑いを誘われる。〈銅ではなく信頼〉では、ジンメルが『貨幣の哲学』のなかで言及した前近代のマルタ島の鋳貨を訊ねて、筆者は遥々現地マルタ島へと向かう。これは旅行記というより冒険譚である。果たしてその鋳貨を探し当てることができるのか。ページをめくれば著者の撮影した実に貴重な写真とともに、驚くべき発見、そしてもはやジンメル以上にジンメル的と形容したくなるような、しかしこの著者ならではの探求がさらに続き、読者は恐らくかつて誰も訪れたことのないところまで連れて行かれる。〈動機理解の限界〉では、主観的世界へのヴェーバーとジンメルのアプローチの相違が簡潔に論じられながら、それに留まらず、最終局面に至って、著者はその眼差しをジンメルその人のヴェーバーへの思い、その主観的世界へと向ける。しかもその文脈で読者には唐突とも思える手際で世阿弥が招き入れられる。しかしこれに触発され、かの著『風姿花伝』を紐解いてみれば、世阿弥とジンメルは「秘密」について同じことを語っており驚かされる。こうして、それぞれの項目でそれぞれの世界が繰り広げられ、全体には妙に不統一な感じが漲っている。

これはいかなる事態であろう。〈社会学的美学〉冒頭のエピグラフ（抜粋）――「あらゆる歴史的な生のかの重大な対立、すなわち、社会にとって個人はたんなる分肢であり要素であるにすぎないとする社会の組織と、個人にとって社会は単なる下部構造にすぎないとする個人の評価」。ここで論じられるのは「全体と部分の関係性」（p.105）というジンメルの中でもきわめて重要な論点である。著者は、「社会学的美」に関するジンメルの議論を簡潔に解説する。原初的な美は「均整」であり、それは社会集団においては、「社会を均整的に統制する」「専制的な社会」に見られる。しかし「やがて洗練化と深化とが、不規則的なもの、不均整なもの」に「美的な魅力」を見出すようになる。不均整な社会は、「それぞれの人びとが自己の固有の条件にしたがって独立に生きつくすという理想」に基づき、「かくておのずと全体は、無規則で無均整な現象を呈するようになる」（p.107)。いわゆる自由主義、個人主義的な社会がこれである。これはまさに本書のことではないか。要素である個人をあくまで部分化しよう

とする全体とそれ自身１個の全体であろうとする個人との関係、ジンメルの一大重要論点が、そのまま本書のあり方、そして著者たちのあり方に体現されているのではないか。

さらに、〈「より以上の生」と「生より以上」〉のエピグラフ――「統一体としての生の働きは、限界づけられていることと限界を踏み超えることとを含んでいる」（『生の哲学』より）。ここでは、生と形式に関するジンメルの議論が解説される。「文化を生み出すのは生であり、一つの独立した文化形象＝形式となったものが「生より以上」のものである」が、「他方、生はその本質において、現状の形式に留まっているものではなく、常に流動的な状態にある。つまり、現在の形式に収まることなく、さらに自己展開を続けていく」（p.181）。これが「より以上の生」である。

生は形式を必要とする。自らを限界づける。だが、「生のさらなる先への流動は停止し難いもの」（Simmel 1918=1994: 24）であり、それゆえ生はたえずその限界を踏み越えていく。これが「生の自己超越」である。本書において、著者たちはひとつの形式を打ち立てたが、当の彼らの文章は、その形式を超えて溢れ出そうとしている印象なのである。もちろん本である以上、一度決定した項目立てや目次が踏み超えられ打ち壊されるということはない。それでも、著者たちの書く行為は、「停止し難いさらなる先への流動」として、以前に自らでつくりあげた形式から充溢し自己超越せんとするかのようにみえる。ジンメルの言う「生と形式」「連続性と形式」（ibid: 28）の関係がここにみえる。「生は休みない先への流れであり、あれこれの特定の形式だけでなく、いかなる形式であれそれが形式であるがゆえにその上を超えて氾濫する」（ibid: 35）。

全体と部分、社会と個人、生と形式、両者の矛盾と拮抗、生の超越 —— 本書を読む過程を通じ、私たちは期せずして、ジンメルのなかでも最重要の論点をそのまま体験させられてしまう。エキサイティングである。それも、著者たちが筋金入りのジンメル研究者であってこそのことではないかとも思う。不均整の社会学的美を語り、形式を不断に超えていく生を語る、ジンメル的スピリットのようなものが本書全体を流れ脈打っているように感じられる。本書は、追随を許さない、「宝の地図」であるだけでなく、それ自身で読者に直接与えられる「宝」でもあると言えよう。

【文献】

Simmel, G., 1918=1994,『ジンメル著作集９ 生の哲学』白水社.

（くさやなぎ　ちはや　早稲田大学文学学術院教授）